

クラス		受験番号	
出席番号		氏 名	

二〇一四年度

# 全統高2記述模試問題

## 国語

二〇一五年一月実施

(100分)

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、左記の注意事項をよく読むこと。

### 注 意 事 項

- 一、問題冊子は21ページである。
- 二、解答用紙は別冊になっている。(「受験届・解答用紙」冊子表紙の注意事項を熟読すること。)
- 三、本冊子に脱落や印刷不鮮明の箇所及び解答用紙の汚れ等があれば、試験監督者に申し出ること。
- 四、試験開始の合図で「受験届・解答用紙」冊子の国語の解答用紙を切り離し、下段の所定欄に **氏名**、**在学高校名**、**クラス名**、**出席番号**、**受験番号** (受験票の発行を受けている場合のみ) を明確に記入すること。なお、氏名には必ずフリガナも記入のこと。
- 五、解答には、必ず黒色鉛筆を使用し、解答用紙の所定欄に記入すること。
- 六、指定の解答欄外へは記入しないこと。採点されない場合があります。
- 七、試験終了の合図で右記四、の事項を再度確認し、試験監督者の指示に従って解答用紙を提出すること。



□ 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(配点 六十点)

もう一〇年近くも前のこと、ある日の夜、私は知人と新宿駅西口の「思い出横丁」(「シヨンベン横丁」という名称のほ  
うが人 A に膾炙<sup>かいしゃ</sup>している)の赤提灯で杯を重ねていた。鰻<sup>うなぎ</sup>の寝床のような狭苦しい店の戸口近くでは、ジャンパーに  
ごま塩頭という風体の六〇がらみの男性が、妙にむつとりとした表情を浮かべながら独り爛酒<sup>かんざく</sup>をあおっていた。

突然戸口が開いて白人青年の二人組が店に入ってきた。明らかに観光客だとわかる彼らは、店の様子を撮影させてくれ  
と英語で頼んだ。店主は許可を与え、彼らはカメラを構えた。そのときだった、例のむつとり親父が「どこから来た  
の?」と青年たちに話し掛けた。日本語だったが、雰囲気を通じる。青年たちはアメリカから来たと答えた。その瞬間、  
むつとり親父の頬がたちまち緩んで、彼は立ち上がった。

「そうか! アメリカなのか! 俺はなあ、アメリカが大好きなんだよ! 本当に大好きだ! アメリカのものは何で  
も好きなんだ! 握手してくれ!」

日本語を解さない青年たちは、あまりにトウトツ<sup>a</sup>な好意のほとばしりに少しトウワク<sup>b</sup>しながらも、親父と手を握り合っ  
た。

こんな出来事が目の前で展開するのを見ながら、私は、ムズムズ<sup>1</sup>するような不快感が腹の底から湧き上がってくるのを  
はつきりと感じていた。外国人旅行者を歓待し、できる限りの好意を示すのはよいことだ。しかしながら、この場所は、  
この場所に限っては、アメリカ人に対してそれをするのにふさわしい場所ではない。

御存じの読者も多いと思うが、新宿駅西口のシヨンベン横丁は、狭小な居酒屋が長屋状に軒を連ねる飲食街であり、そ  
のルーツは戦争直後の焼け跡・闇市にある。空襲で焼き尽くされた後の東京の街に簇生<sup>そうせい</sup>した闇市によって形成された街並  
みが、どういうわけか戦後の新宿の開発・再開の波を乗り越えて、いまなお残存しているのが、シヨンベン横丁なので

ある。私は、こちらでも焼け跡のバラックが残存している東口のゴールデン街と並んで、この空間が、首都の最も賑わう場所・超一等地に存在していることを、大事なことであると思っている。その理由は、これらの空間がピカピカした均質な商業空間に差異を持ち込み、街に彩りを与えているから、というような事柄ではない。それらは、「平和と繁栄」の夢をいったんはかなえたこの街で、われわれが「歴史に対するエチカ」<sup>(注1)</sup>とでも呼ぶべき何かを手放さないために、必要なのである。

突然入ってきて写真を撮ろうとしたアメリカ人青年たちを責めようという気には私はならない。おそらく彼らは、この街の歴史的成り立ちについて何も知らないのであって、

X

 やって来たにすぎなからう。問題は、例のむつつり親父である。彼が特段下劣であるわけではない。おそらくは単に標準的な日本人であるにすぎない。実に彼の言葉は、戦後の日本人の対米意識を大体において正確に言い表しているではないか。そうであるとすれば、日本人が一般的に下劣なのだ。

この街がそこに生きる人々もろともかつて焼かれたという歴史、その焼かれた証拠のご真ん中で、焼いた張本人たちの末裔<sup>まつえい</sup>に愛想を振りまくというこの姿は、ジョン・ダワーの言う Embracing Defeat という態度の対極にある。戦後対日占領期の政治・経済・風俗・人々の意識や生活といった多様な側面を網羅的かつ客観的なヒッチ<sup>c</sup>で描き出しベストセラーとなったダワーの著書の日本語版は、『敗北を抱きしめて』と題されていたが、その原語 Embracing Defeat はダブルミーニングである。すなわち、敗戦という経験を抱きしめ、それを血肉化したということと同時に、潔く敗北を認めそれを甘受する、という意味である。しかるに、この愛想のよさは、敗北をほとんど完全に忘れているからこそ、というよりむしろ、本当のところそれを認めていないからこそ、表れることができたものにほかならない。負けた証拠のご真ん中で、負かした張本人に向かい合ってもなお思い出せない記憶、そのようなものは本来あり得ない。にもかかわらずこうしたことが起こりうるのは、この街を見舞った焼夷弾<sup>しょういだん</sup>の雨が、巨大な台風か何かの天災のごときものに脳内で変換されているか

らである、としか考えようがない。つまり、意識としては、不可抗力の天災にソウグウ<sup>d</sup>ただけで「戦争に負けてはいない」のである。負けを認めない以上、ここには反省の契機も抵抗の契機も発生しようがない。

蛇<sup>B</sup>を承知で言えば、私の抱いた感情は、ナシヨナリズムに基づくギフン<sup>e</sup>ではない。何も知らずにシヨンベン横丁にフラフラやって来るアメリカ人は怒鳴りつけられるに値するとも思わない。あるいは、この街がアメリカへの復讐、臥薪嘗胆の精神を維持するために残されるべきだと言いたいわけでもない。命ぜられた通りに「鬼畜米英！」と叫んだ同じ口が、命ぜられた通りに「民主主義万歳！」と唱え、「アメリカは素晴らしい！」と唱和するというこの光景の相変わらずの無惨な有り様、それが同じ空間を共有する人間として私には端的に我慢ならないのである。

ベルリンを訪れた際、利用した飛行機の便はデンマークのコペンハーゲンを経由した。われわれ一行は、トランジットでかの地に一泊することとなっていた。空港から市街地のホテルまでタクシーに乗った。運転手は、二〇代前半と思しき、一目で何となくムスリム系<sup>(注2)</sup>とわかる体格のよい、鋭い眼をした青年だった。おりしも当地は、「ムハンマド風刺漫画掲載問題」に揺れていた。同事件は、二〇〇五年九月、デンマークの新聞がイスラム教開祖ムハンマドを過激派テロリストをイメージさせる姿に描いた風刺画を掲載したことに始まった。このことはイスラム諸国からの抗議を惹き起こしたが、年明けにはさらに問題が拡大した。イスラム圏・欧州でデモ等の大衆的な抗議運動が広がるなか、フランスのメディアが「表現の自由」の旗印のもと風刺画を転載、火に油を注ぐ結果となった。コペンハーゲンは、そもそも問題の発端となった場所だけに、ムスリム系住民による連日の大衆抗議運動が行なわれていた。

運転手の青年は、メルセデスのバンに荷物を積み込むとわれわれにどこから来たのか尋ねかけた。「日本からだ」と答えると、彼はやたらと上機嫌になった。彼はすぐに進行中のムハンマド風刺画問題について英語で話し始めた。おそらく彼は激しやすい性格を持つ男なのであろうが、明らかに興奮していた。

「絶対に許せない。すべてはアメリカだ。俺たちムスリムが人殺しだって？ 奴らこそ人殺しだ、世界中で人殺しをやっている。帝国主義者どもめ！」

われわれは適当に合いの **C** を入れながら聞いていた。雪がみぞれ状に積もった夕刻のハイウェイを飛ばしながら、彼は後部座席のほうへ身を乗り出し、大きな手振りとともに声をはり上げる。頼むからちゃんと前を見てくれ……。そのときだった、続いて出てきた彼の言葉は私を驚かせた。

「お前らは日本人だろう。日本人は本当に偉大だ、俺は深く尊敬している。アメリカとあれだけの大戦争をやったんだ、なんて見上げた根性なんだ！」

歴史的知識として、イスラム圏が一般に親日的であること、それを決定づけたのは日露戦争における日本の勝利であって、白人の帝国主義に苦しめられ、それに抵抗する同志という感情をイスラム圏が日本に対して抱いていたこと、トルコなどでは東郷平八郎にあやかって当時生まれた子供に「へいはちろう」と名づけるのが流行した、といったことぐらいは私も知っていた。驚きだったのは、日本の対米戦争がこの延長線上で認識されている、ということだった。

さらに彼はこう続けた。

「俺たちは絶対に許さない。お前たちもそうだろう？ あいつらは原爆を落としかがったんだからな。今度アメリカとやるときは、絶対一緒にやろうぜ！」

返事に詰まった。その理由は、語学力の不足と長旅の疲れだけではなかっただろう。私は説明したかった。彼の言うことに心情的に共感する部分を私個人は持つが、それは日本人のマジョリティの心情ではないこと、戦後の日本が米軍に巨大な基地を供給し続けてきたこと、一貫して親米的な政権が選挙による審判に基づいて権力を握ってきたこと、国民生活の文化的側面においても米国からの影響は絶大であること、大部分の国民の心情は親米そのものであり、「もう一度やる」などと夢にも思っていないこと……。しかし、言葉が出てこない。どこからどう説明したらよいものか、見当もつかない

のだ。シオンベン横丁で目撃したあの光景と、<sup>2</sup> 運転手氏の想像する日本人の姿とのこの眩暈を催すような落差、これを系統立てて説明しうる言葉を探した結果が、本書であるのかもしれない。

彼の言葉からもうひとつ私が理解したのは、なぜテロが東京で起きていないのか、ということだった。九・一一以降、アフガン侵攻とイラク戦争を背景に、二〇〇四年三月にはマドリッドで列車爆破事件、二〇〇五年七月にはロンドンで同時爆弾テロが起きていた。当時の私は、何時東京で爆弾テロが発生しても何の不思議もない、と考えていた。むしろ、ロジカルに考えれば、やられないほうがおかしいとさえ思っていた。彼の言葉からわかったのは、イスラム圏が日本について大変な幻想ないし誤解を抱いている、ということにほかならなかった。この幻想によって、東京は爆弾テロの脅威から救われているのだ、と。

そして、この経験から七年という時間が流れた。<sup>(注3)</sup> 本年一月に発生したアルジェリアにおける武装勢力の人質事件は、日本とイスラム圏との関係の歴史における転換点を告げている。いまだ情報が不足しており詳細は不明瞭だが、すでに出てきている証言によれば、英国BP社の幹部と並んで日揮の現地派遣社員が襲撃の筆頭級のターゲットであった可能性は高い。<sup>(注4)</sup> Y。「戦後の終わり」のあらゆる徴候にもかかわらず日本が永続敗戦レジームを固守してきた間にも、歴史は進行している。歴史を無理矢理にせき止める試みは、かくしてすでに犠牲者を生み出してしまったのである。

(白井 聡『永続敗戦論』)

(注) 1 エチカ……倫理、倫理学。

2 ムスリム……イスラム教徒。

3 本年……二〇一三年。この年イスラム系武装勢力が、アルジェリアの天然ガス精製プラントを襲撃した。その際、日本企業「日揮」の関係者十人を含む三十七人が犠牲になった。

4 永続敗戦レジーム……敗戦を認めないがゆえに、かえっていつまでも、敗戦の事実がつきまとう事態。

問一 傍線部 a↘e のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄 

A
---

↘ 

C
---

 には人間の身体の部位や器官を表す一字の漢字がそれぞれ入る。それを記せ。

問三 空欄 

X
---

・

Y
---

 に入れるのに最も適当な語句を、次の各群の A↘オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

X  
ア 勝者のヒロイックな心情から  
イ 甘美なノスタルジーに駆られて  
ウ 若者ならではの鋭いセンスに導かれて  
エ 自らのアイデンティティを確かめるために  
オ 無邪気なエキゾチズムに促されて

Y  
ア 憶測でものを言うのは避けるべきだ  
イ 幻想が永遠に維持されるはずもない  
ウ 日本の戦後は終わってはいない  
エ 日本は信用などされてはいなかった  
オ 誤解が必ずしも悪だとは限らない



問四 傍線部1「私は、ムズムズするような不快感が腹の底から湧き上がってくるのをはつきりと感じていた」とあるが、筆者はなぜそのような「不快感」を感じたのか。百二十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問五 傍線部2「運転手氏の想像する日本人の姿」とはどのような姿か。八十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問六 本文の内容に合致するものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア アメリカの青年が、自分たちの国の犯した罪を知らずに新宿に来たとしても、彼らが戦争を起こしたのではないのだから、彼らを責めることはできない。

イ ダワーが戦後の日本人を描いた『敗北を抱きしめて』という本の題名には二重の意味があったが、日本人はその一方の意味しか理解することができなかった。

ウ アメリカを絶対に許せないと声高に話すムスリムの青年の様子には、かつてアメリカを口汚く罵倒した日本人の姿を彷彿とさせるものがあつた。

エ 日本が自らの過去をきちんと認識してこなかったことは、現代世界の中で日本の位置づけが不安定なものになっていることと関係している。

オ 戦後の再開発にも壊されることなく残存し続けた新宿の古いバラック街は、日本が戦争の悲惨さを忘れないために残しておくべき場所である。



国語の問題は次の頁へ続く。

二 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(配点 五十点)

日本列島は中心に向かっていくと山の襞<sup>a</sup>の間隔がどんどん狭くなり、平らな土地が減っていった、と解説してくれる室井光広さんの説明を同行した出版社の人たちといっしょに聞きながら、わたしは初めて日本列島を皺<sup>しわ</sup>のある生き物のように感じていた。この辺は言語学的に見ると抑揚の存在しない地帯で「橋」と「箸」と「端」の区別がないのです、と言う室井さんの作品では、そう言えば、「タンゴ」が急に「単語」に繋<sup>つな</sup>がり、「サンバ」が「産婆」になって意外な展開をしていくことを思い出した。これはRとLの区別が聞き取れない日本地方出身のわたしがBrücke<sup>(注2)</sup>(橋)という言葉の中にLücke(空白)を発見し、更に、そこから発展させて、異文化間に橋を渡すことよりも空白を発見することの方が重要かもしれない、などという結論に勝手に達する思考方法と似ているのかもしれない。自分の育った発音体系の中では区別がなされない二つの単語(タンゴ)がくっついて踊り出す。そこに産婆(サンバ)が駆け付けて、新しいアイデアが産まれる。これは言語移民の特権であって、一見簡単そうに見えるが、一つの言語の内部に留まる者にはなかなか真似のできない芸だ。その芸が妬<sup>ぶ</sup>ましいので、そんなのは駄洒落に過ぎないさ、と負け惜<sup>1</sup>しみを言う人もいる。

生まれた時には誰でもあらゆる言語を聞き取り発音する能力が潜在的にあるのだと言われる。つまり、一つの母語を学ぶということは、その他のあらゆる可能性を殺すことになる。たとえば日本語だけ聞いて育つと、生まれて六ヶ月ですでにRとLを区別する能力を失ってしまうという実験結果さえ出ている。もちろん、それを後から改めて学び直すことは不可能ではないが、それほど簡単なことではない。逆にヨーロッパの言葉が母語だと、中国語などにある抑揚を聞く能力が一度は失われ、漢字のような映像を記憶する力がどんどん鈍ってしまう。

生まれたばかりの子にあらゆる言語を話す能力が潜在的に具<sup>c</sup>わっているというのは素晴らしい。しかし、あらゆる潜在的能力を保っていたら一つも言葉がしゃべれない。だから、極端に言えば、たった一つを残して、残りの能力を取り敢<sup>あ</sup>え

ず全部破壊していくのが、母語の修得だということになる。ちょっともったいない気もする。大きくなってから外国語をやりたくなるのは、赤ん坊の頃の舌や唇の自由自在な動きが懐かしいからなのかもしれない。大人が毎日たくさんしゃべっていても絶対に舌のしない動き、舌の触れない場所などを探しながら、外国語の教科書をたどたくし声を出して読んでいくのは、舌のダンスアート<sup>2</sup>として魅力的ではないか。柔軟に、あらゆる方向に、反り返り、伸び縮みし、叩き、息を吐く舌、一つも意味を形成できないままに自由を求めて踊りまくる舌、そんな舌へのあこがれがわたしの中に潜んでいる。でも、そんな舌を本当に持つてしまったら、もう誰にも理解してもらえないことになる。だから仕方なく半硬直した単言語人間の舌を取り敢えず装って、まわりと意味をやりとりしながら暮らしていく。しかし、その奥には自由な舌への衝動が隠されているのではないか。

かつてハンブルクの大学で夏期日本語集中講座の手伝いをして日本語を教えていた時に、「髪の毛が長くなったので、病院へ行きます」とある学生に言われて、思わず「え?!」と声を上げてしまった。髪の毛が伸びてしまうことがドイツでは一種の病気と見なされているわけではない。ドイツの学生には「病院」と「美容院」がほとんど同じように聞こえることにこの時、初めて気がついた。確かに違いは微妙だが、それでもわたしはこの二つの単語が似ているとさえ感じたことがなかった。一つの言語の内部にいる者には見えない類似はたくさんあるのだ。

他にも似たような経験はいろいろある。日本語を勉強している学生が、作家の写真やサインを売っている店がハンブルクにもあると言うので、いくらドイツに文学ファンが少なからずいるといっても、そんな店は成り立たないだろうと言うと、その店はとても流行っていると言う。わたしは驚いたが、話しているうちに、彼が「作家」ではなく、「サッカー」のことを言っていることが分かった。サッカーの写真や選手のサインならもちろん売っているだろうし、買う人もいるだろう。「作家」と「サッカー」も、最後の母音が長いか短いかの違いしかない大変似通った単語だが、母音の長短が決定的な区別の基準になる日本語の内部に住んでいる人間には、似ているとさえ感じられない。それに、漢字やカタカナを思

い浮かべながらしゃべっているのです、この二つの単語はわたしたちにとっては清少納言風に言えば「近くて遠いもの」なのだ。最近はコンピュータの漢字変換ミスのおかげで、このような偶然の一致に気がつく機会も増えたが、普通に日本語をしゃべっているだけでは、なかなか気がつかない。

室井さんは、日本語の中に外からしか見えないような繋がりを見出して、繋げて、紡いで、不思議な網を作っていく。それに加えて、方言にしかない表現またはその使い方を拾い上げて、作品の中に種のように蒔いて、育て上げていく。

奥会津の畑はカリフォルニアの畑のように広大ではなかったが、風景の密度が濃かった。野菜も小さな土地にみっしりできていた。「英語で言うセミナーという語は、種という言葉と語源的に繋がっているようです。フィールドワークも畑仕事なんです」と室井さんに言われ、わたしたちはすぐに、なるほどと納得してしまう。室井さんは、シェイマス・ヒニーのエッセイ集を佐藤亨さんとの共訳で出しているが、アイルランドがイギリスに対して持つ距離を創造のエネルギーとして活用する「アイルランド・モデル」と呼べるようなものがあるとしたら、会津も一種のアイルランド（アイズランド？）なのかもしれない。

この場合の「会津」は自分のルーツに回帰するという意味での「地方」とは違う。室井さんには、かつて図書館に勤めていた時期があり、仕事の合間にあらゆる文字体系を学習しようとしていたらしい。図書館という場所があつて、そこを媒介にして、再発見された一つの地方があり、それが自分の育った言語環境だということなのだろう。その畑はフィールドワークをすれば耕され、実を結ぶ。フィールドワークをするのは詩の人類学者である。一度図書館へ行つて、そこから畑に戻つて来て、文字だけでなく、音や物や土や水を読む。自分のルーツがそこにあるから戻つて来たのではなくて、面白い文化がそこにあるから戻つて来たのだ。それは所属するための「ふるさと」ではなく、発掘し続けることのできる常に新しい土地なのだろう、とわたしは室井さんを見ていて思った。

（多和田葉子「奥会津 言語移民の特権について」）

(注) 1 室井光広……福島県会津地方出身の作家・文芸評論家。

2 Brücke……ドイツ語。Lücke も同じ。

3 シェイマス・ヒーニー……北アイルランド出身の詩人・作家。

問一 傍線部 a～d の漢字の読みをひらがなで記せ。

問二 傍線部 1 「負け惜しみを言う」とあるが、ここではどういうことか。九十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問三 傍線部 2 「舌のダンスアートとして魅力的ではないか」とあるが、筆者はどうして「舌のダンスアート」が「魅力的」だと言っているのか、九十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問四 傍線部3「会津も一種のアイerland（アイズerland?）なのかもしれない」とあるが、この表現の説明として

最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア「会津」と「アイerland」の間に「アイズerland」という虚構の土地を浮上させることで、無関係なものどうしを想像力でもって統一することにこそ創造の秘訣があると暗示している。

イ「会津」と「アイerland」とを音の繋がりによって重ね合わせることで、一見したところ共通点などなさそうな土地に、思いがけない文化的な類似性が存在することを巧みに示している。

ウ「会津」を「アイズerland」と呼ぶ諧謔かいぎやく味あふれる表現を通して、新鮮な言語連関によって事物の隔たりを無化するところに文学の面目めんもくがあるということを主張している。

エ「会津」と「アイerland」という、ともに文化的には周縁に位置する土地を、ある種の言葉遊びで繋いでみせることで、一般的な価値観を転覆させるという興味深いモデルの存在を提示している。

オ「会津」と「アイerland」の間に存在する距離を逆手にとって、あえて両者を「アイズerland」という造語のうちに連結することで、かつてなかった言葉遣いを創造することの大事さを示唆している。

問五 本文の内容に合致するものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えよ。

ア 異文化とのあいだに大きな距離があつてはじめて創造的なエネルギーが湧きあがってくるので、安易に彼<sup>ひ</sup>我<sup>が</sup>の共通性を言い募るべきではない。

イ 既成の言語体系からの自由を実現させてくれる点で、外国語の教科書を読むこととコンピューターの漢字変換のミスには共通性がある。

ウ 母語を自明のものとして受け入れていると、各単語の間に存在する音韻上の類似性を繊細に感じ取ることができなくなってしまう。

エ 母語のかかえる特殊性に無自覚なままにいる人よりも、むしろ外国語としてそれを学んだ人の方が、その言語の本質を鋭く把握できる。

オ 方言特有の語彙や音韻には、標準語を相対化する視点を与えてくれるものがあり、それが同時に土地の人々の帰属意識を形成している。

カ 自らの育った言語環境を外部から見つめなおすことで新たな意味を見出すということも、文学の創造的な営みの契機となりうる。



三 次の文章は『源氏物語』の一節で、母君の失踪後、取り残された幼い娘（若君）と乳母、乳母の娘たちの様子を描

いた場面である。乳母たちは、母君が失踪した事情もわからず途方に暮れていたが、乳母の夫の筑紫赴任に同行することになり、若君を連れて行ってよいものか思い悩んでいる。これを読んで、後の問に答えよ。（配点 五十点）

母君の御行方（ゆくへ）を知らむとよろづの神仏に申して、夜昼泣き恋ひて、さるべき所どころを尋ねきこえけれど、つひにえ聞き出でず。「さらばいかがはせむ。若君をだにこそは、御形見に見たてまつらめ。あやしき道に添へたてまつりて、遙か

なるほどにおはせむことの悲しきこと。なほ、父君にほのめかさむ」と思ひけれど、さるべきたよりもなきつちに、<sup>2</sup>「母

君のおはしけむ方も知らず。尋ね問ひたまはば、いかが聞こえむ」<sup>1</sup>「まだよくも見馴れたまはぬに、幼き人をとどめたて

まつりたまはむも、うしろめたかるべし」<sup>3</sup>「知りながら、はた、率て下りね、とゆるしたまふべきにもあらず」など、

おのがじし語らひあはせて、いとうつくしう、ただ今から氣高きよらなる御さまを、<sup>4</sup>ことなるしつらひなき舟にのせて

漕ぎ出づるほどは、いとあはれになむおぼえける。幼き心地に母君を忘れず、をりをりに、「母の御もとへ行くか」と問

ひたまふにつけて、涙絶ゆる時なく、<sup>5</sup>むすめどもも思ひこがるを、舟路ゆゆし、とかつは諫めけり。

おもしろき所どころを見つつ、「心若うおはせしものを。かかる道をも見せたてまつるものにもがな」<sup>6</sup>「おはせましか

ば、我らは下らざらまし」と、京の方を思ひやらるるに、返る波もうらやましく心細きに、舟子どもの荒々しき声にて、

「うら悲しくも遠く来にけるかな」とうたふを聞くままに、二人さし向ひて泣きけり。

<sup>7</sup>舟人もたれを恋ふとか大島のうらかなしげに声の聞こゆる

来し方も行く方もしらぬ沖に出でてあはれいづくに君を恋ふらむ

鄙（ひな）の別れに、おのがじし心をやりて言ひける。

(注) 1 父君……若君の父親。「母君」「若君」とは疎遠になっていた。

2 むすめども……乳母の娘たちで、後出の「二人」も同じ。「母君」とは乳姉妹。

3 鄙の別れ……「思ひきや鄙の別れにおとろへて海人の縄たき漁りせむとは」(古今和歌集)に拠る表現で、「都から離れて遠い田舎に行く」の意。

問一 波線部 a～d の文法的説明として最も適当なものを、次のア～ケの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア 現在推量の助動詞    イ 推量の助動詞    ウ 希望の助動詞    エ 尊敬の助動詞    オ 自発の助動詞  
カ 受身の助動詞    キ 動詞の一部    ク 動詞の一部＋意志の助動詞    ケ 動詞の一部＋助詞

問二 傍線部 1 「え聞き出でず」、4 「ことなる」、5 「ゆゆし」を、それぞれ現代語訳せよ。

問三 傍線部 2 「さるべきたよりもなきうちに」を、「さる」の内容を具体化して現代語訳せよ。

問四 傍線部 3 「おのがじし語らひあはせて」について、乳母とその娘たちが「語らひあはせ」た内容を、本文に即して三点、それぞれ三十字以内(句読点等を含む)で説明せよ。

問五 傍線部 6 「おはせましかば、我らは下らざらまし」を、主語などを補って現代語訳せよ。

問六 傍線部 7 の和歌から、掛詞になっている部分を三字以内で抜き出して答えよ。

問七 この作品の作者名を漢字で記せ。

国語の問題は次の頁へ続く。

四

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（設問の都合で、返り点・送り仮名を省いたところがある。）  
（配点 四十点）

国朝尚書劉南垣公、請<sup>ヒテ</sup>老家居<sup>ス</sup>。有<sup>リ</sup>直指使者、以<sup>テ</sup>飲食苛<sup>キ</sup>求<sup>メ</sup>属吏<sup>ニ</sup>、郡県患<sup>うれフ</sup>之。公曰、「此吾門生<sup>ナリ</sup>。当<sup>ニ</sup>開<sup>ニ</sup>論<sup>ニ</sup>之。」俟<sup>まち</sup>其来<sup>ル</sup>、款<sup>もてなシテ</sup>之曰、「老夫欲<sup>スルモ</sup>設<sup>ケント</sup>席、恐<sup>ルレバ</sup>妨<sup>ゲンコト</sup>公務<sup>ヲ</sup>、特留<sup>タタ</sup>此一飯<sup>ニ</sup>。但老妻他往<sup>ニ</sup>、無<sup>シ</sup>人治<sup>ムル</sup>具。家常飯<sup>ナレドモ</sup>能<sup>ク</sup>对食乎。」直指以<sup>テ</sup>師命<sup>ナルヲ</sup>、不<sup>ヘテ</sup>敢辞<sup>セ</sup>。自朝過<sup>グルモヒル</sup>午、飯尚未<sup>ダ</sup>出<sup>デ</sup>、直指饑<sup>うウルコト</sup>甚<sup>ダシ</sup>。比<sup>およ</sup>食至<sup>ルニ</sup>、唯粟飯豆腐一器而已<sup>ト</sup>。各<sup>おの</sup>食<sup>ラヒ</sup>三碗、直指覺<sup>ユ</sup>過<sup>グル</sup>飽<sup>クラ</sup>。少頃、佳肴美醞<sup>うん</sup>、羅列<sup>セラレテ</sup>盈<sup>みツル</sup>前、不<sup>ハ</sup>能<sup>オ</sup>下<sup>ロス</sup>箸。公強<sup>フレバ</sup>之、对曰、「已飽<sup>クコト</sup>甚<sup>ダシク</sup>、不<sup>よクセ</sup>能也。」公笑曰、「可<sup>シ</sup>見、飲食原<sup>ニ</sup>無<sup>シ</sup>精粗<sup>ニ</sup>。」  
I 時易<sup>ク</sup>為<sup>シ</sup>食<sup>ラフ</sup>、  
II 時難<sup>シ</sup>為<sup>シ</sup>味<sup>ハフ</sup>。時使然耳。」直指然<sup>リトシ</sup>其<sup>ノ</sup>訓<sup>をしヘラ</sup>、後不敢以盤餐責人。

（鄭瑄『昨非庵日纂』による）

(注) ○国朝——ここでは、明王朝のこと。

○尚書劉南垣公——尚書(＝大臣)を務めた劉麟のこと。

○請<sub>レ</sub>老——政界を引退する。

○直指使者——官名。地方を巡察する役人。後の「直指」も同じ。

○属吏——下級役人。

○郡県——地方の行政府。

○門生——弟子。

○開論——教<sub>ス</sub>え論<sub>ズ</sub>す。

○治<sub>レ</sub>具——食<sub>ス</sub>事を作る。

○家常飯——家庭の日常の食<sub>ス</sub>事。

○粟飯——精<sub>シ</sub>白<sub>シ</sub>ていない穀物の飯。玄米御飯。

○佳肴美醞——ご馳走とうまい酒。

○精粗——ここでは、「精」は「うまい」、「粗」は「まずい」。

○盤餐——ご馳走。

問一 傍線部 a「尚」、b「而已」の読みを、送り仮名も含めてすべて平仮名で記せ。

問二 傍線部 1「当<sub>三</sub>開<sub>三</sub>論<sub>一</sub>之<sub>二</sub>」、5「時使<sub>レ</sub>然耳」を書き下し文に改めよ。

問三 傍線部 2「之」は何を指すか。本文中の語句を抜き出して答えよ。(返り点・送り仮名は不要。)

問四 傍線部3「直指以師命、不敢辞」を現代語訳せよ。

問五 傍線部4「已飽甚、不能也」とあるが、直指使用者が「佳肴美醢」を食べられなかったのはどうしてか。八十字以内（句読点等を含む）で具体的に説明せよ。

問六 空欄Ⅰ、Ⅱに補うのに最も適当な漢字一字を、それぞれ本文中から抜き出せ。

問七 傍線部6「不敢以盤餐責人」は「敢へて盤餐を以て人を責めず」と読む。この読み方に従って、解答欄の原文に返り点を施せ。（送り仮名は不要。）





